



製品

御社で製作している主力製品についてお聞かせ下さい
 坪井社長 多種多様なイベントシーンに対応できるイベントカーや特殊災害対応車、水難救助車といった緊急対応車、またFRP樹脂を使った製品の設計から加工なども行っています。

パリダカールラリーで使われるカミオンも手掛けられているとうかがったのですが。
 「HINOチームスガワラ」のカミオンのボデーを製作しています。これは、1996年のグラナダカールラリーのトラック部門に参

戦した車両が最初で、現在まで製作し続けています。長く携わってこれたのは、お客様のニーズにフレキシブルに対応できるのがよかったのではないのでしょうか。

御社のモットー、今後の抱負などをお聞かせください。
 先代から言っていることなのですが、「仕事は楽しくなくてはいけない」というのがモットーです。私は営業も担当しているのですが、仕事をする際に自分が楽しめる仕事を取りたいと思っています

す。こちらが楽しんで仕事をする、お客様もそれに乗ってくれる。結果、出来上がった商品もいいものになっていることが多いですね。
 抱負は、今まで同様これからも何ものにもとらわれない、縛られないで仕事をしていきたいということでしょうか。
 今ある技術を更に磨き、新しいものもどんどん取り入れて、お客様のニーズにいつでも応えられるようにしていきたいですね。

NET WORK

会員会社紹介 Vol.51

ものづくりへのこだわりと蓄えた技術でお客様のニーズに応える

東海道新幹線を静岡で下車、東海道線に乗り換え、約15分ほどで西焼津に到着する。線路沿いの道を静岡方面に歩くこと約3分、「TSB」の文字が見えた。

取材 / (社)日本自動車車体工業会 事務局次長 瓜谷優一

坪井特殊車体株式会社

DATA

本社
 静岡県焼津市小屋敷138
 TEL 054-629-3001
 FAX 054-629-3004
 資本金 1,000万円
 従業員 25名
 事業所規模
 敷地 約 4,343㎡
 工場 1,550㎡
 車体工業会加入
 1974年(バン部会)



代表取締役社長 坪井 弘一

特徴・沿革

坪井特殊車体株式会社は、1972年に先代社長であった坪井鐘二郎氏によって創業された。自分の手でお客様のニーズに沿った製品を造り上げ、提供したいとの思いで立ち上げた会社であった。

最初はトラック架装がメインであったが、1973年にFRPボデーと液体窒素式冷凍機の組み合わせによるマイナス50度の超低温車を開発する。このFRP樹脂の採用は、坪井特殊が最初であった。まぐろなどの遠洋漁業の運搬に使われる冷凍車は大変好評で、「坪井の車体でないともぐり」とまで言われていた。

それと並行して、花王石鹼

(現・花王)のリフトローラー車による省力車両の開発、1974年には末端配送用小型車の開発を行い、花王石鹼の物流の一翼を担ってきた。これらの商品はお客様と何度も話し合い、検討して生まれた車両であり、創業時に掲げた最初の思いが、実現した車両でもあった。

以降、その思いは受け継がれ、現在の製品へと繋がっている。オープン型ステージカー、ゲートシステム車、イベントカーなど次々と製作、1985年に製作した移動展示販売車(フロア4t全天候型)は、その年のトラックショーでシルバーアロー賞を受賞している。そのどれもが一品一様で同じ車両

はない。
 "お客様と共に造り上げる"このことは、創業時から揺らぐことなく今でも製品に反映されている。これまで蓄えてきた確かな技術、技能で前例にないものに取り組み、形にする。それこそが坪井特殊車体の強みであり、こだわりでもあるのだ。



パリダカールラリー参戦車両



トラック部門に参戦しているカミオン。昨年末に行われたレースでも見事完走



設計では熱くディスカッション中。考えながら仕事を進めることで、新しいやり方も生まれてくる



車体を組み上げるのはグループ毎で行われる。1台を約1カ月半ほどで仕上げる

Universal Area 7.0



車両としての走行性を維持しながら、空間の可能性を広げていくというコンセプトで作られた車両。用途に合わせた大きさで空間を展開。写真の車両は、総床面積が約50坪あり、イベント会場としての活用が可能

ウイング付ステージカー

ウイング式のルーフと両側に広がる広いステージを持つタイプ



人

従業員の特徴は？
 少数精鋭で仕事をしているので、従業員は車造りについては全般を通しての対応が出来ます。

しかし造り上げる車がそれぞれ違う内容なので、同じやり方というのはないです。現場ではグループ毎考えながら作っているため、作業内容はそれぞれ違います。

作業内容も多種多様で、そういった作業が積み重なって今の当社があると思います。そうした技術

と自信の積み重ねでお客様の望む車両ができる。そこにまた新しい何かが生まれるのだと思います。

若手の育成で力をいれていることはありますか？

現場で一緒に仕事をしながら覚えてもらうのが主体です。新人でも自分で考えて仕事を進める。そのことに力を入れています。

車が好き、物づくりが好きという新人が多く、定着率も高いです。